

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第百二十九号

原告団レポート

CO患者——
中山岩男さん

延々続く話

CO患者・中山岩男さんのこと
いこといこと……何のこ
とにもせよ、いったん彼が話し始
めるのに耳を傾けるとなると、木
の幹に枝がつき、枝に葉がつき、
葉の間から蕾が顔を出し、それが
やがてふくらみ出して、ついで、茶
褐色の包被を破り、ピンクの花を
咲かせ、花びらが風に舞い落ちる
と後にタネが結実し、初め緑だっ
たのが日がたつて真っ赤に熟する
と、こんどは小鳥がやってくるそ
れをついばみ、果肉の部分だけた
べると、タネだけはどこかへ落ち
ます。年を越すと、そこから小さな
芽が生え始めてきて、また……。
このように彼の話は延々と打ち続
き、どこまでも果てがな
い。「じつと聞いておれば、二、三
日どころか一週間たつてもまだ
終わらないじゃないですか」と、
は妻・リウ子さんの言葉だが、そ
の話を妻は二折三折しながら後
なる。「あれ、何の話から始ま
ったのだか」「たまたまと見え
くら首をかしげて見たら、初め
初めのあたりは早やがすんでし



CO患者・中山岩男さん。たずねた日、珍らしく庭にいたが、カメラを向けると首に巻いていたタオルをはずして気取った。かつては優れた満鉄マンだった。

ぼつねんと過す一日

失くしたと思っただ入れ歯がノドの奥から……

朝夕、キャンデー嬢をつれ散歩

妻のリウ子さんにはほんのこ
なかつた。でも「酔いざめでも
どげんなりしたもんやわからんじ
ゃった」(中山さん)というわけ
で、そこではじめてリウ子さんも
腰をあげ、何かといえはすぐ厄介
になる組合に力添えを頼んだり、
田結旅行が催された温泉の旅
館に直接電話をかけ、探してもあ
りませんでした。中山さんの入れ歯
はここから現われてはこなかっ
た。

驚いた医者
どうするともできなかったが
どうしたのか、その日から
うものは飯がノドからはらな
なつていった。ひんやりか
え、たんとすまふた。「は
いるのはそれでこそお茶が

痛みもなく
それはかりではなかった。その
ときはずい、中山さんのノドの
内部は、ひっかかった入れ歯のた
めに腐だらけとなり、すでに赤く
ただれていたというのに、それほ
どの痛みを感じないというのにお
かしかった。「自律神経をやられ
るともんですけん、痛さがわから
んとです」(と彼はいうが、事実
彼が、人ならば当然感するべきほ
ずの痛みを、いったいどれほど感
ずることが出来るのか、疑問だ。
これは数年前のことだが、
何か仕事をしていたとき、右脚の
かかとに太い釘を踏抜いたことが
ある。釘は、地下足袋のゴムで部
厚く覆ってある部分を通して突き
刺さったものだったが、彼は突き
刺さったことにはさかなく、自分が
その釘をいつ、どうやってひき抜
いたのかさえ、記憶にないのだ

今の暮らし
考えれば、こんな中山さんもか
つての満鉄マン時代は努力のひと
としてまわりから尊敬を集め、三池
三川鉱入社後は三池労組員として
仲間とともにあの三池闘争を闘
抜き、そのルッポのなかでできた
られた闘士の一人だ。
水保闘争にもはりつけオルグと
して参加し、炭労が組織した政
闘争では、仲間とともに上京し

愛犬も家族
中山さんは明治の人間。といっ
ても四十四年の十月十八日生れで
こし六十八歳になる。
もともと彼は太平洋戦争前は満
鉄マンだったのだが、敗戦後やむ
なく引き揚げてきた後、昭和二十
三年の九月三川鉱に入社した。乙
方の開発掘進だった。
妻はリウ子さん。大正六年八月
六日生れたから、夫より六つとし

被災したが
三池三川鉱炭じん大爆発に被災
した彼が救出されたのは、爆発後
もう十二時間以上もたつていた。
担架に乗せられて三井大病院に

入れ歯失う
某日のこと、中山さんが所属す
る職場分会の田結旅行が、玉名温
泉の旅館で催された。Y病院に
通ってこいたものの、これはほ
思ひ当たる症状もなかった彼は、
もちろん参加した。
ところがまだそんな時刻でもな
いのに、いくらか酔ってはいたよ
うだったが、仲間の一人につれら
れて帰ってきた。「どうも、中山
さんの様子がおかしい」とい
ことだった。

もの忘れも
もの忘れも、尋常ではない。人
の任事の手伝いをやるといつて
は、手にする道具類を、使う場所
まで次々になくしてしまつて
は、こわられたり。つい鼻の先
のとろへたすねていくにも、パ
スを利用することがまたできな
い。乗ったバスが果たしてこ
らくかわからないうからで、だから
いって歩くとなれば、不自由な
足をひきずつてのちよちよ歩きで
は……。もっぱら自転車を活用す
ることにしているが、この場合も
ひっくり返ってケガして帰ること
が珍らしくなく、突っ立っている
電柱に自分の方からイヤというほ
どぶつかつていて、左の鎖骨を
折ったこともある。

妻の思いは
次は、彼のCO中毒症状につ
ての、晴病院の吉田院長が書
きしるしたカルテ(昭和五十三年
二月十四日付)の一部——
「神経症状」各腫反射著明に
亢進(離体路症状)。歩行不能。
共同運動障害あり。精神症状「多
善性。短気。人格変化あり。記録
力障害著明。計算障害著明。記憶
力障害軽度……。今後治療必要」
彼はすでに定年退職した体で障害
等級二級の補償を受けている想
者である。

た、とリウ子さん。
三百くらいつと、中山さんの
首の両側が急に腫れ出してきた。
不思議にそれはどの痛みは感じな
かったものの、大事をとつてさ
そく町の某耳鼻咽喉科病院へ。
中山さんのノドをぞいた医者
が、素とん狂な声をあげた——
「あれ、こんなところに入れ歯
が……。彼の入れ歯は、自分の
ノドの奥にひっかかっていたので
ある。いくら組合に頼もうと、ま
だ玉名の旅館に電話をかけて探
してもおもう、これでは出てくる
はずがない。
それにしても、小さな入れ歯な
らともかく、あのでかい入れ歯
の奥にひっかかっているのなら、
ひびひひひ、しかもそれがわから
ないはず……。妻のリウ子さん
は、CO患者の間、話でこそ
るんぞ悲劇の生じていることを知
つてはいたが、今自分の夫に、そ
の恐るべきCO中毒症というもの
のもつこの不可解な現象を見、
あせんとした。たつた。

けい行動に加わりもした。
それが今は見てきた通りで、よ
ほど余儀ない用事がない限り、朝
と夕に三十分ずつ小さな愛犬——
キャンデー嬢をつれて散歩に出る
以外は、一日じゅうほとんどコ
ソの腰をとりながらたたはつねん
と過すだけの彼。手も近くにも
しあれば、新聞をくり返しへり返
し手にもし、テレビを見るでもな
く見ないでもなく……。でも、新
聞の記事やテレビの番組のつ
味が、果たしてどれほどその心
や、あるいは無惨にも傷つけ
られた中枢神経に刻まれていくもの
か。

かづきこまれたが、初めのうち
昭和四十八年生れて今年六歳にな
る愛玩用の小型犬——キャンデー
嬢(ヨークシャ・テリア種)がそ
れ。末女の長子さんが生後四十八
日目の彼女を買って帰ったのだ
うで、お嫁にいくとき両親に託し
たものだ。中山さん夫婦をま
わが実の親たちでもあるかのよう
に慕いながら、畳のうえで暮ら
し。ただ、日に朝と夕の二度だけ
は、父親がわりの中山さんの散歩
のおともをしなければならぬ日
課がある。
翠——三十九年も、早や災害か
ら一年近くなる十月頃のことだ
たという。はからずも彼をつかま
えたCO中毒症が、それも思ひも
寄らず重症だといつてをま
ぎと焼きつけずにはおかない、驚
くべき出来ごとが起きたのであ
る。